

人間の能力を無駄にする官僚組織

ところが、太平洋戦争の実際は、そうではなかった。

もちろん、太平洋戦争当時の陸海軍には、頭脳明晰な将軍もいたし、博覧強記の提督もいた。人格高潔な軍人は多かっただろう。しかし、戦争の結果として現れた決定や行動はきわめて拙劣なものであった。

どうしてそうなったのか。それは当時の「軍」という組織に個人の知識や勇気を役立たなくする仕掛けができていたからだ。それをひと口に言えば「官僚主義」ということになるだろう。

官僚組織の特色は、まず第一に、専門分野別の縦割り組織にある。陸軍は陸軍、海軍は海軍で生え抜きの人材を育てる。民間から将軍になる者もないし、文官から提督になる者もない。すべて幼年学校や兵学校を出て生涯を陸軍または海軍に捧げる。このため、一見深い専門知識を持つように見えるが、実は先輩の受け売り以上には出ない。他の世界で起こっている進歩も、他の分野との比較も応用できない。井の中の蛙は、どんなに井戸の中に詳しくなっても、全体としては世間知らずなのだ。

第二は終身雇用年功序列、そして仲間内の評価だけで人事が行われることだ。このために軍人社会は「戦争に勝つ機能体」よりも「軍人仲間の心地良さを求める共同体」になってしまった。こうした場に出世するのは、仲間の評価を得るための事なかれ主義者に限られる。各方面、各部隊に等しく兵力と予算を分配し、各司令官の要望と一律 割カットで聞き入れるような方法が採用される。平時なら予算の無駄遣いや非効率ぐらいで済むが、戦時にはそれが敗北に繋がってしまう。

試験で人材は見出せない

そしてもう一つ、太平洋戦争の頃の陸海軍の無能さには、試験主義の教育があった。

試験とはそもそも何者か。それはテレビクイズと同じで、出題者の隠している正解を当て合うゲームに過ぎない。これには、二つの条件がある。一つは、試験の問題には必ず答えがあること。

もう一つ易しい問題から解く方が有利だ、というのだ。

こんな条件の中で優秀な成績を収めて出世した者は、実社会に出ても同じことをする。つまり答えのある易しい問題だけを手掛けるのだ。「答えがある」というのは、「先例が思い出せる」ということだ。「易しい問題」とは着手し易いという意味である。これでは万事が先例踏襲の総花主義になり、斬新な発想も大胆な改革もできるはずがない。

太平洋戦争中の日本軍は、日露戦争時代の発想と体制から出られなかった。日露戦争で日本陸軍は白兵銃剣の突撃で勝った。だからガダルカナルでもインパールでも、フィリピンや沖縄でも同じこと繰り返して敗北した。

海軍は日本海海戦の艦隊決戦で圧勝した。だから太平洋戦争でも戦艦同士の海戦を求めて走り回るばかりで負けてしまった。帝国海軍には最後まで「補給」の理論と戦略思想がなかった。敵の補給船を優先的に攻撃することもしなかったし、味方の補給を効率化することも考えなかった。佐世保の軍港から出駆けて日本海の艦隊決戦で勝った時から進歩が止まっていたのである。

知価社会の教育は長所を伸ばせ

私が偕行社国民学校を去ってから、間もなく六十年が経つ。その間に世の中は大きく変わった。社会の構造も経済の規模も技術の内容も、まったく別の

ものになった。しかし、教育の思想と目的だけは変わっていない。

教育の仕組みは変わった。六・三・三・四の新制になり、教科のカリキュラムやクラスの編成は大きく変わった。教育の内容も変わった。軍国教育から民主教育に、男子専門から男女共学に、皇国史観から英語やコンピュータ重点に、変貌した。

しかし、長所を伸ばすよりも欠点をなくして、試験に合格する生徒を育てようという教育思想は変わっていない。この国では、体育が得意で算数の苦手な生徒には算数の補習をするのが常である。個性と独創性を重視するアメリカなどでは、体育の得意な生徒には算数の時間を削っても、体育を重点教育するのは大違いである。

二十一世紀に入って世界は知価社会になった。多様な知恵が創造する知価が、経済の成長と企業の利益の主要な源泉となる時代がはじまっているのだ。

そんな世の中では、答えのあると分かっている易しい問題を解くよりも、答えがあるかないか分からない難問に挑戦する個性と創造力のある人材こそ貴重である。

二十一世紀の追手門学院が、個性と創造力を育てることを第一とした教育思想を持ってくれば、日本と世界の役に立つだろう。



昭和17年撮影の航空写真